

「長期避難生活の影響でストレスを抱える高齢者、子ども、母親に笑顔届け、
「心のケア」「コミュニティ形成」につなげる」事業

写真を通して被災地の人々とふれあい
笑顔や元気を届ける

東北出身のプロのカメラマンを中心に、ヘアメイクアーティスト、モデル、タレント、スポーツ選手らが参加する「笑顔プロジェクト」。被災地を写真で元気づけようと、仮設住宅を回ってイベントや撮影会を行っている。撮った写真は現場でプリントして住民にプレゼント。東日本大震災で多くを失った人たちに笑顔と新たな思い出を届ける活動となっている。

避難住民が集える場をつくり
写真撮影会やメイク体験会を開催

笑顔プロジェクトのメンバーには岩手県の陸前高田市、久慈市、岩泉町、宮城県の気仙沼市、石巻市など被災地の出身者が多く、「自分たちにも何かできることはないか」との思いから活動をスタート。震災直後の2011年5月14日、ファッション誌などで活躍するプロのカメラマンやヘアメイクアーティスト、モデルらが陸前高田市の避難所を訪れ、写真を撮ってプレゼントしたり、女性にメイクをしたりして被災者とふれあった。被災者からは、「思い出がすべて流されてしまったので、この写真は宝物です」、「震災後初めてお化粧をして元気が出た」など、たくさんの感謝の言葉と笑顔ももらったという。がれき撤去のような現場作業以外でも、こうして地元の人たちを支援す

ることができることを知り、活動を続けていこうと決意を新たにしました。

復興支援現地サポートリーダーとして活動を取り仕切る渡辺賢史さんは、現地での活動でなによりも「笑顔の力」に魅せられたと話す。

「カメラに向かう皆さんは笑顔でとてもいきいきとした表情をしていて、被災されているということを忘れてしまうほどです。でもその背後には計り知れないご苦労があることを思うと、笑顔だからこそ伝わってくるものがあります。この笑顔の力をたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。撮った写真をフェイスブックや写真展などで発信し、写真の笑顔を見て多くの人に笑顔になっていただきたいし、笑顔を伝えることで被災地の現状も伝えられたらと思っています」

活動については、当初の写真やメイク体験をプレゼントするというものから、「笑顔プロジェクト」として、各地域の仮設住宅などでミニイベントを開催して被災された人が笑顔になるきっかけをつくり、その笑顔写真を残し笑顔の力を広める活動へと発展させていった。「楽しいこと、みんなが集まれる場所を提供することで、心のケアやコミュニティづくりに役に立てれば」と、自治会、地元NPOなどとも連携して活動している。また、最近では現



撮影会で撮った写真は現場でプリントして贈る



プロのメイクさんに化粧してもらい思わず笑顔に



岩手県山田町(左)、宮城県亘理町(右)で開催したイベントのチラシ

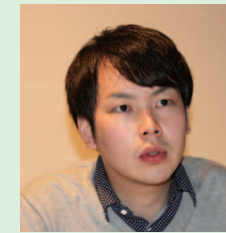
地からイベントの開催に合わせてぜひ写真を撮って欲しいと呼ばれることも多くなっているという。

被災3県の仮設住宅を回る
「笑顔キャラバン」を実施

活動の拠点として1か所に重点を置くのではなく、避難生活をしている人たちのもとを広く訪問することとし、2011年5月から2014年3月31日までに167か所で活動してきた。このうち今年度は「3000人に支援を届ける」ことを目標に、福島、岩手、宮城3県の仮設住宅や地元イベントをはじめ、県外避難者の多い埼玉県、千葉県など、40か所を訪問した。AJOSCの助成は、延べ300人以上に及ぶカメラマンなどボランティアの交通費などに活用された。

今年度の活動としては、撮影会やメイク体験を含むボディペイントやハンドマッサージ、クラウンショーなどの各種イベントを被災各地で主催したほか、2015年1～3月には各1週間ずつかけて福島、岩手、宮城3県の仮設住宅を回り住民の笑顔撮影する「笑顔キャラバン」を実施した。また、2013年に誕生したグラウンドを失った沿岸被災地の少年野球大会「リアスリーグ」の決勝戦(千葉ロッテマリーンズのQVCマリンフィールドで開催)の写真撮影をはじめ、被災地域の地元イベントや学園祭にも多数参加して撮影会やメイク体験会を行った。会津若松市で開催されたイベントには福島出身タレントのなすびさんも参加し、地元の人たちとふれあった。撮影した写真は、来年度に都内で計画している写真展で展示する予

担当者より



今年度の活動で築いた
ネットワークを
今後に生かしていきたい

NPO法人 笑顔プロジェクト
復興支援 現地サポートリーダー

渡辺賢史さん

この1年の活動で、新たな出会いがあり、ネットワークも広がり、被災地の現状を知ることもできました。これを生かして、来年度以降も被災者の方が前向きになれるような支援を続けていきたいと思っています。さらには私たち団体が自立できるよう、この活動を広く発信していくことにも力を入れていきます。

定だ。

「被災地で活動しているとたくさんの笑顔に出会い、こちらが元気をいただくことも多くあります。一方で、今なお笑顔になれない方もたくさんいらっしゃいます。私たちにできるのは、その方たちが次の一歩を踏み出すきっかけづくりを続けていくことだと思います。これからも自治体などを通じて現地のニーズを聞きながら、支援の行き届いていない地域や求めてくれる先を中心にできるだけ多くの人たちとふれあっていきたいと考えています」と、渡辺さんは活動への思いを新たにしている。

今なお20万人以上が避難生活を強いられており、仮設住宅での孤独死や子育てのストレス、子どものPTSDなども増えているという。若者らしい発想で被災者の心に寄り添い、地道に活動を続ける「笑顔プロジェクト」の今後に期待したい。



仮設住宅の人たちとイベント後の記念撮影をするメンバーの若者たち